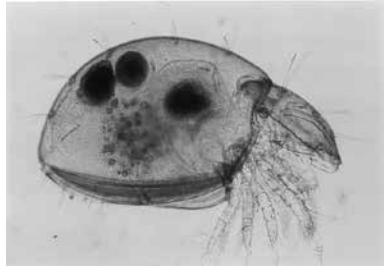


まえがき——ダニ研究のまにまに

私の本業はダニの研究である。人呼んで、「ダニ博士」と言われている。正式には「農学博士」なのだが、人も嫌がるダニを研究しているので、からかい半分にそう呼ばれているのである。若いころは「ダニー・ボーイ」と呼ばれたこともある。

初対面の人に「どんなお仕事をしておられるんですか？」と聞かれ、「生物の研究をしています」というと、「ああ、そうですか」では終わらない。「生物といっても、いろいろあるでしょう。どんな生物ですか？」と来る。しかたなく、「ダニです」と答えると、相手はしばらく沈黙、人の顔をポカーンと見つめてから、「ダニって、あのいやらしい虫ですか？」「ええ、そうですよ」「なんでまた、ダニなんかを研究するんですか？」「可愛いからです」そこで、絶句。

それで終わってしまう場合はいいが、相手が興味を示して食い下がってくるときは、ダニについての世間一般の誤解を解くため長々と説明する羽目になる。ダニは世界に五万種以上いて、日本だけでも約一九〇〇種が知られていること。そのうち人畜に寄生し吸血す



ササラダニ

るものは約五パーセント、農作物に被害を与えるものが五パーセント、両方合わせても一〇パーセント、ダニ族全体から見れば無害なダニのほうのはるかに多いこと。ダニはこの地球上、あらゆる場所に生息し、北極から南極まで、海岸から高山の頂まで、原生林、雑木林、人工林、公園緑地、草原、果樹園、畑、湿原、湖沼、洞窟に至るまで、あらゆる環境に見いだされること。さらに、農作物の害虫であるハダニを捕食してくれる天敵ダニや、チーズを熟成させるのに必要なダニなど、有益なダニもいること、などなど。

そんなダニの中で、私が特に注目したのはササラダニ（鼯ダニ）類と呼ばれる一群のダニ類である。多くは土壤中に生息し、地表に堆積した落葉や落枝をかみ砕いて食べ、植物遺体の分解を促し、豊かな土づくりに貢献している。決して人畜の血を吸ったりはしない。口の構造がそのようにはできていない。さきほど「可愛いから」という表現をしたが、その姿形は本当にかわいらしく、コガネムシやテントウムシに似ている。

しかも、私の興味をそそったのは、種類数が極めて多く、ほとんど研究者がいらないとい

うことであつた。私はへそ曲がり人間であり、多くの人々が関心を持つものにはそつぽを向くたちなので、ササラダニはわたしの研究テーマとしてうってつけのものであつた。私は頭のいいほうではないので、人のやらないことをやれば、何とか芽が出るだろうという考えもあつた。しかし、未開拓の分野に突っ込んでいく際には仲間もいないし、指導者もない。全く孤独な戦いである。実際に研究を始めてみると、採集したササラダニはみんな「名無しの権兵衛」ばかり。それに片っ端から名前を付け、新種として記載していった。その結果、五十年間で私が名付け親になつた新種のダニの数は日本産だけでも三百種以上に達した。

そんなわけで、私が勤務した博物館や大学の研究室では、ほとんどの時間顕微鏡にしがみついてダニの観察に明け暮れていた。しかし、街中を歩いている時、電車やバスに乗っている時、レストランで食事をしている時などは頭の中からダニは消え、周囲の人間の観察をする習性がついていた。ダニの生態も面白いが、人間の生態も観察していると、なかなか面白い。

それと同時に、街中で見かける標語や広告などの日本語、ラジオ・テレビの中で使われる日本語のなかに気になるものがあつて、見過ごせなくなつてきた。それらのことを、気

が付いた時に手帳に書き留めておく習慣が身についた。顕微鏡から身体を離し、頭の中が空になった時の休息時間に見聞きしたの中から、「面白いなあ」とか「変だなあ」と思うことが集積していった。それらのことの一部は、あちこちの新聞や雑誌などに書き散らした。それらをまとめ、さらに新たに書いたものを加えて、一冊の本にしたいという気持ちが強くなった。論文や専門書ばかり書いていないで、そんな本があってもいいではないか。

そこで思い切って私家版で出したのが『一度でいいから、やってみて!』という随想集である(二〇一六年六月出版)。これは友人知人に配ってかなり好評を得たが、印刷した数百部はすぐになくなってしまった。そこへ友人の古川弘典氏(はる書房)から論創社の森下紀夫氏を紹介され、商業ベースに載せた出版を考えてあげましょうという、ありがたいお勧めをいただいた。一般に、科学者のエッセイなどは、著者がよほどの有名人でないと売れない。いわゆる有名人ではない私が書いたエッセイが売り物になるかどうか、はなはだ不安である。

本書の第I部のタイトルに「へそ曲がり人間」とあるが、私のことだ。普通の研究者が見向きもしない森の落葉の下に暮らすダニを研究するなどは、確かにへそ曲がりであるが、

本書の読者に私の言うことがもつともだと言っていただけなら、私はへそ曲がり人間ではなくなるかもしれない。

本書は、以前に出した『一度でいいから、やってみて！』を母体としている。そのなかの最初のほうの随想の部分はほぼそのまま掲載した（それぞれの出典は末尾に明記してある）が、何十年も前に書いたものも含まれ、今読むと時代遅れでおかしな点もあるのは、お許し願いたい。続く「気になる日本語」の部分は大幅に追加充実させ、読者と共に考えるよすがにしたいと思った。最後の川柳の部分も、あらたに思い付いたものを書き加えてある。

野山でダニを採集するのも面白いが、街中で「へんな日本語」を見つけて採集するのも面白い。ダニ博士が気になる日本語は、多分一般の方々も気になることだろうと思う。本書のエッセイの部分と川柳は、読者が同意して膝を叩いて笑い飛ばしてくださいばいいし、気になる日本語の部分はそれに気づいて少しでも正しい日本語が見直されれば、筆者の望外の喜びである。

さあ、読み始めてください。ダニはほとんど登場しませんから、ご安心ください。

平成二十九年十一月十日

青木淳一

ダニ博士のつぶやき
目次

I 人・心・行動

- 1 へそ曲がり人間 16
- 2 戦中・戦後の学習院 23
- 3 知らないことの幸せ 27
- 4 花鳥蟲魚 31
- 5 生き物を種の単位で認識しよう 33
- 6 一度でいいから、やってみて！ 37
- 7 シルバーシートの失敗 39
- 8 旅は道連れ四人掛け 43
- 9 好意が通じないとき 45
- 10 サーピスの違い 47
- 11 豆博士が育つ森 49
- 12 超一流と二流 51
- 13 第四次性徴の喪失 53
- 14 無関係の関係 57

II 食べる・飲む

- 15 テニス狂い 59
- 16 数字の色 61
- 17 ぶつかる日本人 63
- 18 太め、やせ、どっちがいい？ 66
- 1 ダニチーズとギンダラ 70
- 2 あと何食 73
- 3 料理が育たない地 75
- 4 鬼蕎麦、炙り海苔 78
- 5 乾杯の作法 81
- 6 寿司屋で 83
- 7 男の料理 86
- 8 ふりかけ 89
- 9 鴨南蛮 90
- 10 シラウオ、シロウオ 92
- 11 夕食 93

Ⅲ 本当にあつた、ちよつと怖い話

- 1 一人多い！ 96
- 2 襟裳岬の怪 97
- 3 寒いね 98
- 4 森の妖精 99

Ⅳ 気になる日本語

- 1 青信号 105
- 2 赤トンボ 107
- 3 いただいて！ 108
- 4 一個年上 109
- 5 うまい 110
- 6 エレベーターの開閉ボタン 112
- 7 鸚鵡返し 113
- 8 御頭つき 115
- 9 お知らせ 116
- 10 おビール 117

- 11 お求めやすいお値段 118
- 12 降りる方が済んでから 119
- 13 おわれてみたのはいつの日か 120
- 14 各位殿 121
- 15 カモシカのような脚 122
- 16 川崎病 123
- 17 逆手(ぎゃくて、さかて)に取る 124
- 18 ギヤをあげる 125
- 19 行司の軍配は…… 126
- 20 グリーン車 127
- 21 化粧室 129
- 22 結果を出す、評価する 130
- 23 原生林 132
- 24 こうしたなか…… 133
- 25 甲板(こうはん、かんばん) 134
- 26 ここでは右側通行 135
- 27 サンド 136
- 28 事件に巻き込まれた 138

46	認知症	161	29	准教授と助教	139
45	にこたま	159	30	承知してございます	140
44	なんだろ	158	31	ジューシー	141
43	ナイーブ	156	32	助手席	143
42	手と足	155	33	紳士服	144
41	ちようどから、いただきます	154	34	すごい美味しい	145
40	宅急便とセロテープ	153	35	スピード感をもって	146
39	正しい交通ルール	151	36	専門家アクセント	147
38	多大のご迷惑とご心配	150	37	だいじょうぶです	149
37			38		
36			39		
35			40		
34			41		
33			42		
32			43		
31			44		
30			45		
29			46		

62	リピーター	181
61	ライバル	180
60	ライスカレー	178
59	よこあま(横浜)	177
58	雪に変わりはないじゃなし	174
57	やたらと句読点	173
56	役不足	172
55	やばい	171
54	目(め)のあたり	170
53	幅員減少	169
52	ビジネス・クラス	168
51	ハンバーグになります	167
50	犯人の方がおっしゃった	166
49	パンツ	165
48	はやて	164
47	博士(工学)	162

V 意地悪川柳

あとがき

193

I
人・心・行動

1 へそ曲がり人間

先日の日曜日、家の納戸の中をゴソゴソと片づけていると、一冊の古びた文集が出てきた。埃を払ってみると、小学校の時の卒業記念文集とある。だれでもが片づけものの最中によくやるように、ガラクタの中に腰を降して読みはじめた。今はもう偉そうな大人になってしまった親しい友が幼い頃に記した文集を懐かしく読んでいるうちに、終りのほうに「大きくなったら何になりたいか」という一覧表があった。

その頃の子供というのは、今のようにテレビなどで悪知恵がついていないから、全く無邪気なもので、一番多かった志望が総理大臣と電車の運転手なのであった。「大臣」というのは日本で一番偉い人だと思っていたし、電車の運転手は、これまた憧れの的であった。制帽のあごひも掛け、運転席に座って前方を正視し、「出発進行！」とかなんとか独り言を叫んで、カチツカチツと変速機のハンドルを少しづつ廻しながらスピードを上げてゆく、その姿をぼくらは運転室のうしろのガラスに鼻をこすりつけて見つめていたものだ。

しかし、私の名前の下に書いてあった職業は大臣でも運転手でもなく、なんと「農林技

官」である。現在の私は「文部技官」として国立科学博物館に勤めているから、他の連中が大臣や運転手になりそこなったのにくらべると、私はほぼ目的を達したことになるわいと苦笑してしまった。ことほど左様に、私は子供のころから少しばかりへそが曲っていたらしい。

ところで、私の専門はダニの研究である。ダニというとだれでもいやな印象を受けるらしく、聞いた人はみんなヘンな顔付きになって、「へえー、ずい分ヘンなものを専門にされたんですね」という。そして、とたんに奇人を見つめるような眼つきになるのを見て、私は内心たいへんに満足する。その次の質問はもう決っていて、「どうしてそんなヘンなものの研究する気になったんですか」とくる。

これには大した理由はない。自分は生物が好きだったし、同じ生物の研究をするなら、だれもやっていないようなものを手掛けてみたかったまなのである。私が研究対象に選んだダニは、ダニの中でも特に人に知られていないササラダニ類というなかまで、森の中の落葉やコケの下に住んでいて、決して人や獣の血を吸うことをせず、平和で長閑な暮らしをしている。人畜寄生性のダニよりはるかに種類が多く、現在までに日本から一八〇種くらいみつまっているが、その半分以上は学界未知の新種で名無しの権兵衛だったので、私

が名付け親になってやったものである。

登山バスに乗ってやってくる観光客はもちろんのこと、採集にやってくる生物学者の多くでさえ、この広大な森の地面一面に可愛らしいタニが生息していて（生息数は一平方メートルあたり三万〜五万匹）、毎日落葉をこつこつと噛み砕いては土壌生成作用に一役買っている、などということは知ってはいない。こうして、森の小人たちと私のひそかなつき合いはすでに十五年も続いているのである。

人のやらない仕事をし、人の知らない楽しみを持つのは、この上もなくいいものである。ところが、世の中には人の仕事や楽しみを羨ましがる人間の何と多いことか。この地球上には実にいろいろな事や物があるのに、人の耳から入り、周囲に見えるものしか存在しないような錯覚に陥っている人が多い。よく解釈すれば、他人と共通の楽しみを持ちたいという、きわめて単純な、よい性質の人達の集まりなのであろう。

ひねくれ者の私から見ると、世の中にはずい分と判らないことが多い。まず第一に、一番強いものに味方する心理が判らない。野球は巨人、相撲は大鵬という人がほとんどだが、私はどちらかというと、二番目くらいが好きだから、阪神とか柏戸びいきであった。

山へゆくにしても、有名な山や観光地は嫌いだから日本アルプスなら北アルプスは避け

て南や中央アルプスに歩が向く。「ここは有名な景勝地ですよ、ホラ、きれいでしよう」と押し売りされると、もういけない。そんな宣伝や立札がなかったら、どんなに素晴らしいだろうにと思う、だから、名もなく美しい溪谷にでくわしたりすると、いつまでも立ちつくして感激している。

万国博にも到々行かなかった。閉会式のときのテレビで島津貴子さんが、「来る前にはいろいろ批判的なことを考えていましたが、いざ会場へやってきて、大勢の人々が無邪気に喜んで帰ってゆくのをみて、ああ、これでよかったんだな」といわれていたが、さすが気の利いたことを述べられたもので、私も同感であるが、私自身は行けといわれてもテコでも動かなかつたろう。

持ちものにしても、だれでもが持っているものにはさっぱり興味がない。そのお陰で、私の持っていたカメラは、あまりに名の無い会社のものであったので、やがて製造停止になり修理もきかなくなってしまった。二台目のカメラも、あまり見かけないので、部品が揃わなかったり、アフターサービスが悪くて困っている。

数年前にハワイに滞在した時に買った車も、中古のスチュードベーカーというやつで、これまた米国で生産中止になって、売り払う時に大分損をした。フォードかシヴォォレーに

しておけばよかったですのである。

今はどうしたわけか、最もポピュラーな国産車の一つに乗っかっているが、それでも、ロールスロイスやボルシエなど少しも羨ましいとは思わないのに、少し型の古いローヴァーやヴォルヴォをきれいに手入れして乗っている人を見かけると、こんちくしょうと思う気は治まらない。私の場合、他人が持てないような最高級のを、というのでない。そんなことを考えたところで貧乏学者の安月給、どうにもなるものでない。高価ではないものの範囲内でなんとかしたいのである。

服装の流行も嫌いなもの一つである。一時は猫も杓子も昼間つからダークスーツを着込んで、日本中が真黒になってオフィス街なんかクロアリの行列のようになったことがあるが、あれもどうしてだか判らない。黒の服は然るべき場所に出る時にはじめて着用し、その時の、普段とはちがう引きしまった身心の状態が、われながら何ともいえずによいものだから、その時のためにとって置きたい。

若い人たちの服装も個性的なようで、実はきわめて画一的、まるで制服のようなものである。「いや、そんなことはない。彼等とてそれぞれに個性のある人間なんだ」と、いくら努力して思おうとしても、あの円い絞りや横文字のシャツをみると、均一に頭の中が

あとがき

本が出来あがってみると、やはり嬉しい。専門的な内容の本が出版された時とはまた違った喜びがある。しかし、さっと読みなおしてみると、今度は恥ずかしさが沸き起こってくる。政治・経済・社会の問題にほとんど関心がなく、その方面の勉強を何もしていないのがバレてしまう。

自分では「人間生態学」だなんて思っているが、ただ意地悪な目で人様の言動を斜交ヒキかいに眺め、感性だけに頼って言いたい放題を述べているだけである。また、何十年も前に書いた文章もあり、今の時代に照らせば見当はずれな感想も多く見当たって恥ずかしい。年を取ると、どうしても小うるさくなってくる。そう言えば、落語に出てくる大家の小言幸兵衛も麻布の住人でしたね。その小言がなくなつて、穏やかな老人になつた時、お迎むかえが近くやってくるのだらう。

平成二十九年十一月二十日

東京西麻布で八十二歳の秋を迎えて

青木 淳一

青木淳一（あおき・じゅんいち）

1935年 京都市に生まれる

1954年 学習院高等科卒業

1963年 東京大学大学院 生物系研究科修了 農学博士

1964年 ハワイ・ビショップ博物館 上席研究員

1965年 国立科学博物館 動物研究部 研究官

1977年 横浜国立大学 環境科学研究センター 教授

2000年 神奈川県立生命の星・地球博物館 館長

現在 横浜国立大学 名誉教授

専門 タニ学、土壌動物学、甲虫分類学

受賞 南方熊楠賞（2001）ほか7賞

著書 『ダニの話』（1968年、北隆館）、『きみのそばにダニがいる』（1989年、ポプラ社）、『ダニにまつわる話』（1996年、筑摩書房）『ダニに喰いついた男』（2000年、青木淳一教授退官記念事業会）、『虫の名、貝の名、魚の名』（共著、2002年、東海大学出版会）、『自然の中の宝探し』（2006年、有隣堂）ほか多数

趣味 テニス、料理、キノコ狩り、梟の置物収集、麻雀、離島への旅

ダニ博士のつぶやき

2018年1月20日 初版第1刷印刷

2018年1月30日 初版第1刷発行

著 者 青木淳一

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1679-1 ©Aoki Jyunich, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。